震災に遭う街

松崎　武志

1994（平成６）年 12 月 29 日の朝、私は三宮駅ホームに立っていた。大学２年のうちにＪＲ全線完乗達成を目指していた私は、長期休暇を利用してＪＲ線をひたすら乗り潰していた。その日も当時運転されていたムーンライト九州（京都－博多）の上り列車を利用し、関西へと戻ってきて、次は和田岬線に乗ろうかと考えていた。その時、私の前に並んでいた中年男性の通勤客どうしが、前日夜に発生した『三陸はるか沖地震』を一面トップで報じる朝刊を見ながらこんな会話をしていた。

「このあたり（青森・岩手の太平洋側）の人達は大変やなあ。こっち（関西）は地震なんてほとんど無いからなあ。」

何気ない朝の光景をいつまでも鮮明に記憶しているのは、その半月後の 1995 年１月 17 日、阪神・淡路大震災によって、三宮一帯が壊滅的な被害を受けるからである。

決して前もって災害を予期していた訳ではないが、日本全国を旅しているとなぜか後になってふと思い出す場面がある。３月の寒い中、釜石駅で駅寝を断られ、路頭に迷っている大学２年の私を、閉店時間の午前２時まで居させてくれたモスバーガー釜石店は、東日本大震災の津波によって流されてしまった。

そして今年の春、旅行・鉄道研究部の旅行で九州に行き、熊本で宿泊した。中一の自由行動を引率した際に、熊本城を見学した。短時間であったが、やはり強く印象に残っているのは、その半月後の４月 14 日に発生した熊本地震により石垣・櫓・天守閣が甚大な被害を受けてしまったためである。現在も城の公開は中止、閉鎖されており、復旧の目処は立っていない。

しかし、大西一史熊本市長は７月 26 日の記者会見で、「天守閣は３年で修復、石垣を含めた城全体は 20 年で復旧させる」との考えを表明した。もしかしたら、鉄研旅行で次に九州を訪れる時には、城を見学できるかも知れない。今回はあまり時間がなく、外観しか見学できなかったが、今度は復元された天守閣はもちろん、加藤清正が築城の際に豊臣秀頼を迎え入れるために用意したとされる『昭君之間』もじっくりと見学してみたいものである。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

３月 10 日、高１部員の西田佳弘君が永眠した。西田君は中二の時に横紋筋肉腫を発症し、以来ずっと抗がん剤治療を受けてきた。今年１月に頂いた年賀状には「学校へ復帰したらよろしくお願いします」と書いてあったが、残念ながらそれは叶わなかった。彼は中三の 11 月から２月までと、高１の 10 月の二度に渡り、学校へ復帰を果たした。二度ある

ことは…と期待していたが、奇跡は起きなかった。高輪の教員になって 18 年目の私には、在学生が亡くなるのは初めてのことである。

３月 18，19 日に桐ヶ谷斎場にて通夜並びに告別式が行われたが、隣の式場では細川護熙内閣で厚生大臣を務めた大内啓伍氏の葬儀がとり行われていた。鈴木宗男元衆院議員など多くの著名人が参列し、勲一等旭日大綬章を授章し、86 歳での逝去は大往生であり、弔問客には笑顔も垣間見られた。一方、西田君の葬儀には多くの高輪生が参列したがみな一様に悲しい表情で、両式場の余りにも対照的な状況に、わずか 16 年で人生を終えねばならなかった教え子の非情な運命を嘆き悲しむしかなかった。

鉄研では模型班に所属し、鉄道模型の組み立てに熱心に取り組んでいた。亡くなった直後は、病から解放され自由になった体で、念願だった鉄道模型の組み立てに取り組んでいるのだろうと考えていた。しかし、四十九日を過ぎた頃、西田君はもう既に輪廻転生を果たし、この世に戻っているのではないだろうかと思うようになった。私の勝手な希望だが、男の子に生まれ変わって、中学受験をして、また高輪中学校に入学して、また鉄研に入って欲しい。そして、今度は 2112 年に誕生するはずのドラえもんに出会えるくらい、長寿を全うして欲しい。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

現高３部員は６名である。中一修了時は 12 名いたが、高２引退時まで活動したのはちょうど半分である。この学年の部員達には人間関係を発端とするトラブルはあまり記憶に無いが、何せ途中で部を離れていった者が多く、その辞めていった部員達も深く記憶に残っている。彼らが初めて参加した冬旅行で、上りムーンライトながら号の指定券をなくしたからといって夜行列車に乗らなかった部員がいて、既に浜松まで来ていた私が下りのムーンライトながら号で引き返し、名古屋駅近くの中村警察署まで引き取りに行ったこともあった。本人が無事だったからよかったものの、笑い話では済まされず、私は学校宛に始末書を提出し、以来中学生の自由行動は必ず２名以上が義務づけられた。

部長はおっとりを体現したような人物で、就任当初は部会を仕切れるのか不安だったが、他の高校部員の協力を仰ぎながら中学部員たちをうまくまとめた。残念ながら４年連続高学祭大賞は果たせなかったが、あまり同じ団体が受賞し続けるのは好ましくないと、個人的には思う。高学祭の反省会では、大賞を逃したことや部の運営における不手際をひたすら詫びていたが、謝る必要はない。どうか胸を張って卒業し、今後も旅行や鉄道の研究を続けていって欲しい。